

大阪商業大学学術情報リポジトリ

情報社会における表現力を育成する役割別能力育成 ・リフレクション方式の研究

研究代表者	正木 幸子
報告年度	2012-06-08
研究課題番号	21500917
雑誌名	科学研究費助成事業 研究成果報告書
ページ	1-6
URL	http://id.nii.ac.jp/1297/00002056/



科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 8 日現在

機関番号：34410

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21500917

研究課題名（和文）情報社会における表現力を育成する役割別能力育成・リフレクション方式の研究

研究課題名（英文）Study of training method in order to emphasize the role playing and reflective thinking of presentation for ICT business society

研究代表者

正木 幸子（MASAKI SACHIKO）

大阪商業大学・経済学部・教授

研究者番号：30249445

研究成果の概要（和文）：大学の一般教育におけるプレゼンテーション教育において、ペアを組んだ相手に、互いに作った発表資料を演じさせるための指示書作成を通して、互いが演じる様子を見て、役割の気づきとリフレクションを誘発させるという「D-P方式」を開発した。Dとはディレクター役（シナリオライターも兼ねる）で、Pとはプレイヤー役（プレゼンターとも言う）である。授業実践とワークショップで具体的な手法を確立し、作る役割・演じる役割・評価する役割に、自分と他者の関係を導入したプレゼンのタイプを設定することで、「D-P方式」を教育手法として位置づけることができた。

研究成果の概要（英文）：We have developed the new method of training presentation in the general education of higher education. In this method, partner of the pair explains the document of presentation content each other. The document is "a idea of the performances for presentation". He/she can be conscious of his/her role in presentation, and he/she can notice the roles and reflection points by looking at partner's performances in pair work.

We confirmed a procedure of this method by class practices. Furthermore, we introduced three roles to explain the presentation work in this method. They are "a role of scenario writing and director (D)", "a role of player (P)" and "a role of evaluator". As a result, we can establish "D-P method" as emphasis method of the role playing and reflective thinking".

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：科学教育・教育工学

キーワード：プレゼンテーション教育、役割分割・役割分担、ペアリング、リフレクション、D-P方式、自作他演自評価型の教育手法、情報教育、高等教育

1. 研究開始当初の背景

高度情報社会では、プレゼンテーション

（以下、プレゼンと記す）能力が必要とされている。これを受けて、従来から大学で行な

われている一般教育科目でのプレゼン教育の方法を見直す必要があると考える。これまで行なわれてきた教育方法の多くは、一般教育科目という制約の中で、受講生が自分で制作・発表・評価までを行なう「プレゼンの経験」という形が主流であった。そこでは、教員は多人数を同時に教育するために、どうしてもプレゼンの質を追求することに時間をかけることが難しいという状況があった。そして、制作されたプレゼンの質は、受講生の能力(知識やスキルや意識)に大きく依存し、初級レベルの教育(プレゼンの経験をさせるだけ)に留まざるを得なかったと言える。

2. 研究の目的

こうしたプレゼン教育の質を高めるために、リフレクション(自己省察)に着目した。プレゼンの質を高めるためには、受講生が制作したプレゼンを自身が客観的に見直し、チェックし、気づき、判断し、修正するという過程を行なうリフレクションが不可欠で、そのためにはリフレクションのきっかけとなる「見直し」や「チェック」を意識させ、「気づき」を起こさせることが重要であると考えている。

これまでのプレゼンテーション教育では、企画から資料作成・リハーサル・発表・評価を一連のプロセスとし、受講者には基本的な発表能力を育成する「一括方式」が主であった(図1参照)。

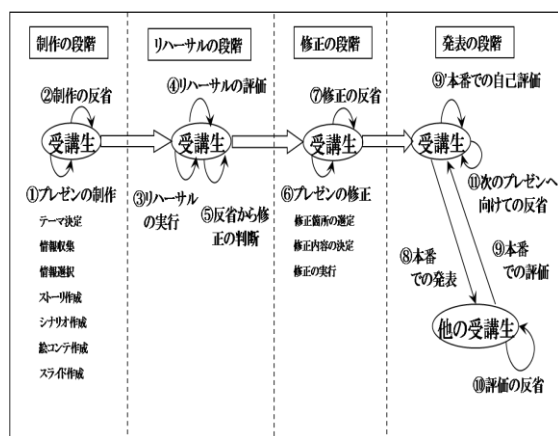


図1 「一括方式」のイメージ

本研究では、各プロセスごとに能力を育成し、総合力としてのプレゼンテーション能力の育成を目指すものである。具体的には、企画から資料作成までのディレクターとしての役割(D役)、D役から指示を受けてリハーサルでプレゼンテーションを担当する役割(リハP役)、本番で聴衆に対して発表を行うプレゼンターの役割(P役)、聴衆として発表を評価するオーディエンスとしての役割(A役)

に分割して能力を育成する。これらの教育方式を「D-P方式」と呼ぶ。

特に「D-P方式」では、リハーサルで発表を担当する役割(リハP役)の設定に特徴がある。従来は、企画・資料作成をした本人自身(本方式でのD役)がリハーサルを行い、それをビデオ撮影したものなどでリフレクションを行っていたが、本方式では、D役が他人であるリハP役の受講生に、自身が作成した資料で発表するように指示書を作成して指示することで、説明内容(セリフ、間の取り方や強調などの注意事項)を文書として明確に意識的に外化(オープン化)させ、その時点でリフレクションができ、さらにリハP役のプレゼンテーションを見て、客観的・意識的にストーリーをリフレクションできる。また、本番発表においてA役からもらう評価でも訓練によってはリフレクションができる。

3. 研究の方法

(1) 「D-P方式」によるプレゼンテーション教育の理論的枠組みの構築

毎月1回(第3日曜日13時~17時)に定期的な会議を開催し、文献調査なども踏まえて、その論理的根拠の追求を行なう。検討には幅広い多様な視座・視点・価値観からの意見が必要であることから、多様な教育経験者から組織した研究グループで行なう。

また、従来のプレゼンテーション教育については、実践例は数多くあるものの理論研究のレベルの事例が少ないこともあり、研究組織以外の有識者に対して専門知識の提供も受ける。

(2) 実践授業の実施とデータ分析

本研究での教育手法の実践的論証の基礎データに用いるために、研究組織のメンバーが担当している授業において、「D-P方式」によるプレゼンテーション教育を組み込むための授業計画を立案する。その計画に基づいた授業を「実践授業」と位置付け、研究組織のメンバーが担当者や支援者やTAなどの役割に分かれて授業を行なう。そこで得られたデータを詳細に分析する。

(3) 実践方法の公開

本方式によるプレゼンテーション教育を実践して頂ける研究協力校を開拓するために、各種の情報教育関係の研究会・報告会に積極的に参加する。また、ワークショップを開催し、実践ノウハウを公開する。

(4) 蓄積した実践ノウハウを整理

分担者、研究協力者、賛同者らによって実践して頂いた授業で収集した資料や調査データの集計と分析を行なう。これらから得られた結果を研究組織全体で解釈して、「D-P方式」によるプレゼンテーション教育の実践ノウハウとして整理する。これらを情報教育関係の学協会、Web等で報告する。

4. 研究成果

「D-P方式」では、図1のプレゼンの4つの段階のうち、リハーサルの段階において、受講生とそのペアによるリハーサル代行（ペアリング）とそのペアリングを成立させるために必要な役割間コミュニケーションを実現する方式とした。

ペアリングでは受講生にペアを組ませ、制作者である本人（D役）は、ペアの相手（リハP役）にプレゼンの指示を行ない、リハーサルを代行してもらう。さらに、この役割を交替で行なうという方法である。

(1) 役割分割・役割分担

図1のように4つの段階ごとにそれを達成する作業（図1中の①～⑩）があり、それらを受講生に分担して経験させるものとし、以下のような役割を設定した。

- ・ディレクタ役（D役）
制作の段階での制作役、リハーサルの段階での指示役、修正の段階での修正役を行なう役割である
- ・リハーサル・プレゼンタ役（リハP役）
リハーサルの段階で発表を代行する役割である
- ・プレゼンタ役（P役）
発表の段階で発表を行なう役割である
- ・オーディエンス役（A役と略す）
発表の段階で発表を聞き、その評価を行なう役割である

このような役割を導入した「D-P方式」のイメージを図2に示す。図2ではリハーサルの段階に、D役とリハP役のペアリングを示す太線の四角の枠を追加している。

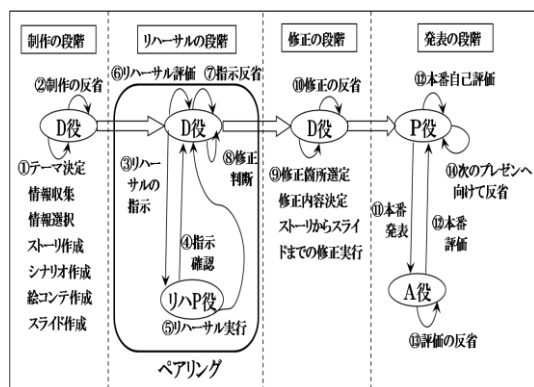


図2 「D-P方式」のイメージ

(2) ペアリング

「D-P方式」では、受講生にペアを組ませ、リハーサルの段階を2人で行なう。D役を行なっている受講生は、ペアの相手にリハP役を担当してもらい、リハーサルを代行してもらう。

D役がリハP役に指示するために指示書に指示内容を記述することで、D役の考えたことを外化することになり、流れや内容について見直しができる。さらに、ペアを組んだことによってリハP役へ行なった指示やその確認のやりとりなどから、D役としての指示や確認に必要な事柄を学びとることができる。

このように、ペアを組むことで自分が他人の目からどのように見えているのかが想像できない受講生でも、自分（D役）が作成した発表内容が他人（リハP役）を通じて可視化され、自分の考えた内容を客観的に見るができるようになるという特長がある。

その結果、リハーサル時に自分のストーリーやスライドの問題点がチェックしやすくなり、修正の段階に必要とされる客観視する（自分の主観を脱して自分を批判的に見る）能力を丁寧に育成できるものと期待している。

さらに、代行のための指示とその指示に対する確認といった役割間コミュニケーションを行なうことで、社会で通用するコミュニケーション能力の一端が育成できる。

ただし、リハP役の演じる結果が、指示の成否やペアの相手の能力に依存してしまう部分があるため、D役を行なう受講生に指示を正確に行なわせることや、ペアを組ませる方法などを工夫する必要がある。

実践授業では、ペアリングを行なうにあたって、受講生の出席状況に注目し、ペアリングを行なう時点で、なるべく出席状況が良い受講生同士を組ませることがポイントである。さらに、ペアリングを行なう時点で、プレゼンが完成している必要があるため、その時点でプレゼンが完成していない受講生は、ペアリングを行なわせず、一括方式でのリハーサルを行なわせることもポイントである。

(3) 役割分担と作業項目を明確にしたリハーサルの段階

「一括方式」と比べ、「D-P方式」ではリハーサルの段階を重視しているため、そのプロセスの詳細を図3に示し、教育上の工夫を説明する。

① 指示項目の決定（D役）

発表の内容や話し方などの指示項目を決定する。

② 指示書の作成（D役）

決定した指示内容を指示書に記述することで、自分の考えたことを外化できるようにしている。記述した指示書は教員に提出する。

③指示 (D 役)

記述した指示書に基づいて、リハ P 役に指示を行なう。このとき、指示内容の抜けや漏れに気づいた場合は、追記して教員に提出する。

④指示受内容の確認 (リハ P 役)

指示を受け、理解した内容を D 役に確認する。

⑤指示受書の作成 (リハ P 役)

指示受が達成できたと判断した後、指示受内容を記述した指示受書を作成する。

※この指示受書で役割間での情報が共有されたかを確認できていると考えている。

⑥リハーサル実行 (リハ P 役)

D 役からの指示に基づき、リハ P 役はリハーサルを行なう。

※D 役がリハ P 役の発表を見ることにより、自身が作った発表内容を客観的に見ることができるようになると考えている。

⑦リハ P 役の発表の仕方のチェック (D 役)

リハ P 役のリハーサルをチェックし、指示通りに行なってくれたかを確認する。

⑧指示の内容や仕方の反省 (D 役)

指示通りにリハーサルが行なわれていない場合は指示内容が悪かったのか、指示の仕方が悪かったのか、などの原因を考える。

⑨ストーリー、シナリオ、絵コンテ、発表資料の見直し (D 役)

反省に基づき、必要ならばストーリーやシナリオ、絵コンテ、発表資料などを見直す。修正が必要な場合は修正の段階へ、必要ない場合は発表の段階へ進む。

(4) 実践授業の内容例

以下に本研究で行なってきた実践授業での標準的な授業回における授業内容を示す。受講者数によって、本番発表の回数を調整することがある。

授業回	授業内容
1	・テーマを決定する
2	・ストーリーを作成する
3	・絵コンテを作成する
4	・スライドを作成する
5	・ナレーションを作成する。 ・ナレーションを決定する ・指示書を作成する。
6	・ペアを決定する。 ・指示・指示受を行なう。 ・指示受書を作成する。
7	リハーサル (1) D 役からの指示に基づき、リハ P 役はリハーサルを行なう。リハ P 役のリハーサルをチェックし、指示通りに行なってくれたかを確認する。
8	リハーサル (2) ペアでの役割 (D 役、リハ P 役) を交代する。内容はリハーサル (1) と同じ。
9	反省・改善・修正 指示通りにリハーサルが行なわれていない場合は指示内容が悪かったのか、指示の仕方が悪かったのか、などの原因を考える (反省)。反省に基づき、必要ならばストーリーやシナリオ、絵コンテ、発表資料などを見直す。
10	本番発表 D 役本人が自分で発表する。発表者は自己評価、他の受講者は他者評価をする。
10	評価結果の講評、まとめ

(6) 教育効果の確認

分担者や研究協力者らによる 4 つの実践授業から得られたデータの分析結果から、代行リハーサルを行なった時点で気づきを誘発することができ、それに基づくストーリーやシナリオ、絵コンテ、発表資料の改善行動を確認することができた。ただし、リハーサル後にあらたに考えて気づいたものについては、プロトコルデータの採取に関して、受講者への負担軽減から実施できていない。

(7) ワークショップでの実践方法の公開

実践方法の公開のためにワークショップを 2 回開催 (2011 年 1 月、7 月、学会発表③⑤参照) し、賛同者を得て実践授業を行なって頂き、結果をまとめ投稿した (学会発表①参照)。

(8) 理論的枠組みの構築：作る役割・演じる役割・評価する役割から見た「D-P 方式」の位置づけ

本来プレゼンには作る役割、演じる役割、評価する役割などの役割が存在することに着目した。これらの役割を受講生に意識させるために、自分と他者の関係を導入し、3 つ

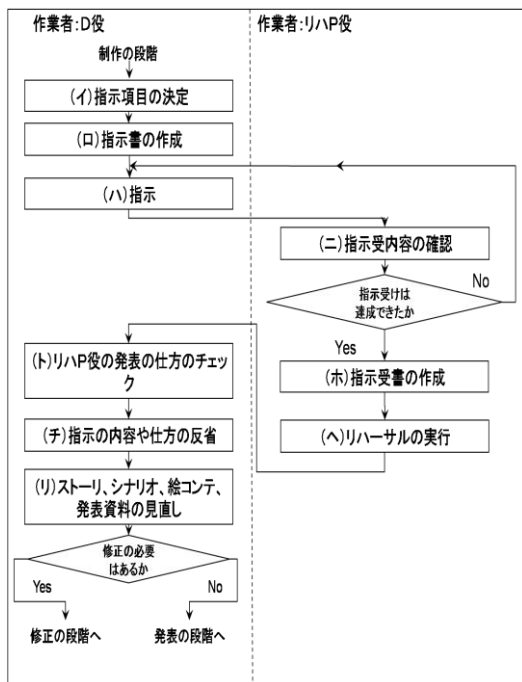


図 3 リハーサルの段階のプロセス

の役割と「自分」と「他者」という関係から $2^3=8$ つのプレゼンのタイプが設定できた。

タイプの名称	作る	演じる	評価する	タイプの説明
1. 自作自演自評価	自分	自分	自分	自分が作った物を、自分で演じて、自分で評価するタイプ
2. 自作自演他評価	自分	自分	他者	自分が作った物を、自分で演じて、他者に評価してもらうタイプ
3. 自作他演自評価	自分	他者	自分	自分が作った物を、他者に演じてもらい、自分が評価するタイプ
4. 自作他演他評価	自分	他者	他者	自分が作った物を、他者に演じてもらい、他者に評価してもらうタイプ
5. 他作自演自評価	他者	自分	自分	他者が作った物を、自分が演じて、自分で評価するタイプ
6. 他作自演他評価	他者	自分	他者	他者が作った物を、自分が演じて、他者に評価してもらうタイプ
7. 他作他演自評価	他者	他者	自分	他者が作った物を、他者に演じてもらい、自分が評価するタイプ
8. 他作他演他評価	他者	他者	他者	他者が作った物を、他者に演じてもらい、他者に評価してもらうタイプ

ここでの他者は、自分以外の他者すべてを含む。他者を複数含むタイプでは、ある役割を担当している他者とその他の役割を担当している他者が同一人物とは限らない。

1番目の「自作自演自評価」が従来の「一括方式」に相当すると考えられる。自分でプレゼンの過程のすべてを一貫して行なうので、プレゼンにかかわる能力をすべて発揮することになる。そのため、初級者には負担が大きいと言え、一般教育科目で初級者に行なうには、工夫や十分な配慮のある指導が必要になる。したがって、プレゼンの評価の視点やその基準などを十分に理解し、同時に複数の能力を発揮でき、客観視ができるプレゼン中級者や上級者には適している。

開発した「D-P方式」は、3番目の「自作他演自評価」に該当することが分かる。すなわち、「自分」に制作することと評価することに集中させて、能力を発揮させることができる。演じる段階に他者が介在するために、他者の目を意識させることになる。しかし、演じることを経験させることができないために、この点を工夫しなければ、初級者には適さないと考えている。また、制作したものを他者に演じてもらい、「自分」の制作したものを忠実に再現してもらう方法であるため、演じる役割の他者とのコミュニケーションが重要となり、この点に注意する必要がある。

(9)まとめ

開発した「D-P方式」は、プレゼン教育の8つのタイプのうちの、3番目の「自作他演自評価」に位置付けられた。8つのタイプのプレゼンは、今後、初級者だけでなく、中・上級者も含めたプレゼン教育を考えていくためのフレームワークになると期待している。これまでに行なった「D-P方式」の実践授業では、初級者に限定したものであったが、論文や研究発表で公表しているように、代行リハーサルを行なった時点での気づきを誘発する効果は確認できているが、リハーサル後に考えて気づいたものについては、今後の課題となっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

- 村上和繁、垣東弘一、正木幸子、横山宏、リフレクションに着目したプレゼンテーション教育手法－8つの教育のタイプ－、園田学園女子大学論文集、査読有、第46号、2012、pp.255-264
- 村上和繁、正木幸子、松永公廣、横山宏、D-P方式によるプレゼンテーション教育、情報コミュニケーション学会誌、査読有、Vol.5、No.s1&2、2009、pp.16-21

〔学会発表〕(計10件)

- 村上和繁、太田和志、正木幸子、横山宏、リフレクションを意識させたプレゼンテーション教育の手法(2)－「他作自演自評価型」の授業実践から－、情報コミュニケーション学会第9回全国大会論文集(2012-03)、pp.22-23、2012年3月10-11日、青山学院大学青山キャンパス(東京都)
- 村上和繁、正木幸子、下倉雅行、中村民明、岡本久仁子、岩崎重剛、石桁正士、松永公廣、横山宏、リフレクションを意識させたプレゼンテーション教育の手法－D-P方式のワークショップでの反応から－、情報コミュニケーション学会第7回研究会研究報告、Vol.8、No.1、pp.46-51、2011年8月27日、長崎大学情報メディア基盤センター(長崎県)
- 横山宏、村上和繁、正木幸子、下倉雅行、中村民明、岡本久仁子、岩崎重剛、石桁正士、松永公廣、ワークショップ－プレゼンテーション教育の視点を変える－、情報コミュニケーション学会第5回ワークショップ、2011年7月30日、大阪電気通信大学駅前キャンパス(大阪府)
- 村上和繁、正木幸子、中村民明、岡本久仁子、岩崎重剛、石桁正士、松永公廣、横山宏、プレゼンテーション教育でのリフレクションの強化(2)－代行リハーサルとひとりリハーサルの気づきの差異－、教育システム情報学会2010年度第6回研究会研究

報告、Vol. 25、No. 6、pp. 101-108、2011年3月19日、九州工業大学飯塚キャンパス（福岡県）

- ⑤ 村上和繁、正木幸子、中村民明、岡本久仁子、岩崎重剛、石桁正士、松永公廣、横山宏、ワークショップーリフレクション能力の育成を目指したプレゼンテーション教育ー、情報教育学研究会（IEC）第247回定例研究会、2011年1月9日、関西学院大学梅田キャンパス（大阪府）
- ⑥ 村上和繁、正木幸子、中村民明、岡本久仁子、岩崎重剛、石桁正士、松永公廣、横山宏、プレゼンテーション教育でのリハーサル時の受講生の気づきーリハーサル代行におけるリフレクションの工夫ー、第6回情報文化学会近畿支部研究会、pp. 48-56、2010年10月23日、摂南大学（大阪府）
- ⑦ 村上和繁、正木幸子、中村民明、岡本久仁子、岩崎重剛、石桁正士、松永公廣、横山宏、プレゼンテーション教育でのリフレクションの強化(1)ープロトコルから見た気づきの差異ー、教育システム情報学会2009年度第5回研究会研究報告Vol. 24、No. 5、pp. 82-87、2010年1月23日、東北大学川内キャンパス（宮城県）
- ⑧ 村上和繁、正木幸子、中村民明、岡本久仁子、岩崎重剛、石桁正士、松永公廣、横山宏、D-P方式によるプレゼンテーション教育ー役割意識とプレゼン代行からのリフレクションー、第5回情報文化学会近畿支部研究会、pp. 1-12、2009年10月24日、摂南大学（大阪府）
- ⑨ 村上和繁、正木幸子、中村民明、岡本久仁子、岩崎重剛、石桁正士、松永公廣、横山宏、D-P方式によるプレゼンテーション教育(2)ー大学における実践事例ー、教育システム情報学会第34回全国大会講演論文集、pp. 372-373、2009年8月19日-21日、名古屋大学（愛知県）
- ⑩ 荒木俊輔、村上和繁、正木幸子、中村民明、岡本久仁子、岩崎重剛、石桁正士、松永公廣、横山宏、D-P方式によるプレゼンテーション教育(1)ー高校における実践事例ー、教育システム情報学会第34回全国大会講演論文集、pp. 370-371、2009年8月19日-21日、名古屋大学（愛知県）

[その他]

ホームページ等

<http://www.daishodai.ac.jp/~cham6991/publications.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

正木 幸子 (MASAKI SACHIKO)
大阪商業大学・経済学部・教授
研究者番号：30249445

(2) 研究分担者

横山 宏 (YOKOYAMA HIROSHI)
大阪電気通信大学・総合情報学部・准教授
研究者番号：20249452
松永 公廣 (MATSUNAGA KIMIHIRO)
摂南大学・経営学部・教授
研究者番号：20099831
野口 紳一郎 (NOGUCHI SHINICHIRO)
龍谷大学・理工学部・実習講師
研究者番号：40319497
下倉 雅行 (SHIMOKURA MASAYUKI)
大阪電気通信大学・メディアコミュニケーションセンター・情報特任講師
研究者番号：80444503

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

石桁 正士 (ISHIKETA TADASHI)
大阪電気通信大学・名誉教授
中村 民明 (NAKAMURA TAMIKI)
tami 情報教育研究所・代表
竹嶋 徳明 (TAKESHIMA NORIAKI)
元住友化学システムサービス(株)・取締役、大阪国際大学・非常勤講師
飯田 慈子 (IIDA YASUKO)
tami 情報教育研究所・研究員
岩崎 重剛 (IWASAKI SHIGEKATA)
元大阪電気通信大学短期大学部・助教授、やる気教育研究所・代表
森石 峰一 (MORIISHI MINEKAZU)
大阪電気通信大学・准教授
浅羽 修丈 (ASABA NOBUTAKE)
北九州市立大学・准教授
稲浦 綾 (INAURA AYA)
竹野内情報工学研究所・研究員、大阪電気通信大学・非常勤講師
大隅 敏明 (OSUMI TOSHIKI)
常磐会学園大学・技術職員
福田 真規夫 (FUKUDA MAKIO)
大阪国際大学・教授
岡本 久仁子 (OKAMOTO KUNIKO)
大阪国際大学・非常勤講師
荒木 俊輔 (ARAKI SHUNSUKE)
花園中学高等学校・教諭
佐野 繭美 (SANO MAYUMI)
摂南大学・技術職員
上田 勝彦 (UEDA KATSUHIKO)
元奈良工業高等専門学校・教授
村上 和繁 (MURAKAMI KAZUSHIGE)
園田学園女子大学・実習支援員、四條畷学園短期大学・非常勤講師
R・H・Schaepe (RICHARD H. SCHAEPE)
大阪電気通信大学・名誉教授
宇治 典貞 (UJI NORISADA)
大阪電気通信大学・非常勤講師